

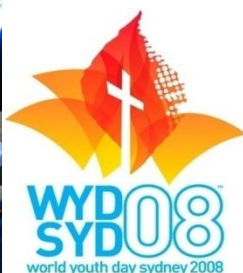
後のプログラムである教皇ミサが行われた。このミサそのものに対する感動ももちろんだが、それ以上に自分がこのミサに与るに至るまでに支えてくれた、もしくは出会った人々の顔が浮かびその方々が祝福されますようにと心から思った。皆、祈っていた。



ミサが終わると各自ホームステイ先へと再び 6km 以上の道のりを歩いて帰った。シドニーのホストファミリーは本当に献身的な姿勢で私たち参加者を迎え入れてくださり、その存在なしにはこの大会の成功はありえなかったと思う。皆、最後の日をホストファミリーと楽しみ次の日へ備えた。

7月21日 13日目

朝、ホストファミリーに別れを告げ A 日程・B 日程それぞれ St Mary 教会へと向かった。この日は振り返りの日に当たっており、まずは各自でそれぞれ黙想して自身の WYD を振り返った。その後、ランダムなグループで分かち合いを行いそれぞれがその時点で抱いた気持ちを共有した。最後にミサが行われ WYD の全日程は終了、各自様々な思いを抱いて帰国の途へと向かった。



担当：名和

松浦司教様によるカテケージス

テーマ「聖霊＝教会の魂」

私たちが聖霊を理解する上でキーワードとなる言葉は「関係 relation」です。

かつて私は神の存在についてよく考えました。しかし、私の指導司祭は私にキリスト教の根幹は「神は存在する」ということではなく「神は愛してくださる」ということだとおっしゃいました。

愛とは一人で成り立つものではありません。このことは三位一体の理解にもつながるものです。三位一体とは、ただ三者が存在するというのではなく父と子の愛を前提に成り立っているものであり、聖霊はそこから溢れるものなのです。

人は神の似姿に作られました。これは容姿が似通っているというのではなく愛し合う関係として作られたということです。カトリックでなくとも人は共通に相手を思いやる気持ちを持っています。



危険な地域へ赴き人道支援に当たる方などはその良い例ではないでしょうか。しかし人間にとって常に愛し合う状態を保つのは難しいものです。時には壁を作り無関係・争いを選んでしまうことがあります。

教会の理念に「全ての人のために派遣され、全ての人が愛し合う関係になるように」というものがあります。私たちカトリック信者の使命は教会の繁栄ではなく、この単純な愛を伝えていくことではないでしょうか。

同様に「救い」とは自分一人が天国に入るというイメージではありません。永遠の命・すなわち天国とは全ての人、そして神との愛が永久的に継続する状態だと私は考えます。救いは相手を思う気持ちあつてのものなのです。

本当の信仰・神を知るとはカトリックであるということではありません。人との愛を知っている人こそ神を知っているのです。このような愛し合う関係を仲介するのが聖霊です。

聖霊は風・息などと例えられることが多くあります。風や息は見えませんが、吹くと物が動くのが見えます。聖霊をこの目で認識することはできなくてもその働きから存在を感じることはできるのです。目に見えぬ神を「信じる」とは「証明する」ということとは異なります。

信仰とは神に近づきたいという望みを持って初めて生まれるものであり、これを助けているのは聖霊の働きなのです。ある日突然許せない人を許せるようになるというのも聖霊の働きです。

このような「愛・許し」といった概念をきれいごとのように感じてしまう人もいます。一度これらは聖霊の働きによるものなのだと肯定してみてもみませんか？

受難におけるイエス様のお苦しみは肉体的なものとは別にあつたのではないかと私は考えています。この世で人として全ての人を愛そうとしたのにそこに「人としての限界」があつたことに心が引き裂かれたのではないかと。

マザーテレサの家へ行った方の話です。インドでは未だに身分制度が根強く残っており彼は低い階層の人々が誰にも助けを受けず死んでいくのを目の当たりにし、衝撃を受けました。

その日教会で熱心に祈っているときにふと顔を上げると十字架上の「私は乾く」との文字が目に入ったのです。「イエスは喉が渴いたのではなく人々の愛の渴きを一手に引き受けられたのだと確信した。ものすごい渴きだったろう」その方は言いました。

このような人の乾き・分裂を癒すのも聖霊の働きです。だからこそイエス様はご自分が天に上られた後、この世に聖霊を送られました。いまだに

世界では様々な分裂や争いが存在します。それらを私たちは他人事と思うのではなく、目を向けていかななくてはなりません。

友達や家族との別れを通して愛するものとの別れの辛さは皆知っていると思います。戦争や分裂はこのような体験とほとんど同じ悲しみをたたえた物なのです。聖霊の力を借りて私たちは派遣されるのです。

神は私たち一人一人の名前をお呼びになります。人が「はい」と答えるとそれを使って派遣されます。決して恐怖主義にご自分の力で解決しようとする方ではありません。

私たちは「召命」といって必ず一人一人が使命を持ってこの世に誕生しています。これから、時には自分には大きすぎると思う使命が待ち受けているかもしれません。でも、ありのままの自分でいいのです。私たちはパン種です。ちっぽけでも自分を指し出すという気持ちが大切だと思います。

イエスがパンを裂かれたら 5000 人の食事になったように、私たちも自分を差し出すことによって神は何倍にもして救いの業を行われます。WYD は終わりではなく始まりです。神の国の実現を目指して、聖霊の力を借りて歩み続けていきましょう。

担当：名和

コラム「日の丸」

- ・日本司教団は、ワールドユースデイで日本人の青年たちが日の丸を掲げることに関して注意を促しています。
- ・戦争中の被害国に対する配慮のためです。しかし実際は国旗があったほうが良いと、参加する青年たちは感じています。松浦司教は、使ってもいいが、日本の国旗にまつわる問題は自覚して使ってほしいと語っています。

Fr 森田



郡山 健次郎 司教様のカテケージス

テーマ「聖霊の内で生きるようにと招かれている」

- ・ガラテヤ3-26「あなた方は皆、信仰によってキリスト・イエスと一致し神の子なのです。洗礼を受けてキリストと一致したあなた方は皆、キリストを着ているのです。男も女も～イエスにおいて一つ～神の約束によってその恵みを受け継ぐものなのです。」
- ・本「生かされて」ルワンダのフツ族の少女の体験を読み司教さんが「自分の信仰体験と重ねてみた」とのこと。トイレに閉じ込められ三ヶ月殺されないように身を潜め、偏見・差別の中、手や目での合図で狭い部屋で過ごす。

“いかに聞くか注意しなさい” “これは内的な戦い” であると。言い聞かせる祈りは力になると話される。



- ・人はいろんな巡礼を経て、いろんな神秘体験をする。妬み、復習は悪魔の仕業であり、ゆるしとの戦いである。そばにいること、逃げない事も大切。
- ・生かされている意味は結局「悪魔に心を奪われないように、二度と行われることのないようにという寛大な心で戻る。これが召命（ミッション）である。
- ・結果①思っても振り回されない事〔肯定的に〕
 - ②油断できない/驚かなくていい「あなたを許します」と言いに来るはず。私たちに出来ることはそれしかない。
- ・「罪・マイナス」から「許し・前へ・プラスへ」人はなんと気高く生きていれるものなのか。
- ・神さまの手にゆだねて巡礼し、生かされる。私自身のあいまいさを否定する。“恐れ” 私の中のユダにしない。「恐れるな！！勇気を持って！！」
- ・神さまはあなたを許すはず。

担当：ジェームス博